

ヒドリガモ 英: Eurasian Wigeon 学: *Anas penelope*

1. 分類と形態

分類: カモ目 カモ科

全長: 43-53cm 翼長: 22-27cm
 尾長: 8-12cm 嘴峰長: 2.8-3.8cm
 ふしよ長: 3.5-4.1cm 体重: 566-944g

※測定値は榎本(1941)による。

羽色:

オス: 頭部は赤茶色で額部分がクリーム色。体の上面と脇腹は灰色。飛行時に雨覆の白色部分が目立つ。オスの第一回生殖羽は、翼と脇腹の境に見える雨覆の羽が白い縁取りのある灰褐色をしていて成鳥と区別できる。

メス: 頭と脇腹は赤茶色。上面の羽は黒に茶色の縁取りがある。

雌雄とも嘴は灰色で短く、先端が黒い。他のカモに比べると額から嘴にかけてが垂直な絶壁になっており、体の色が見えにくい場合でも形状で識別しやすい。

鳴き声:

オスはピューピューと高い声で鳴く。メスはガーガーと低い声で鳴く。

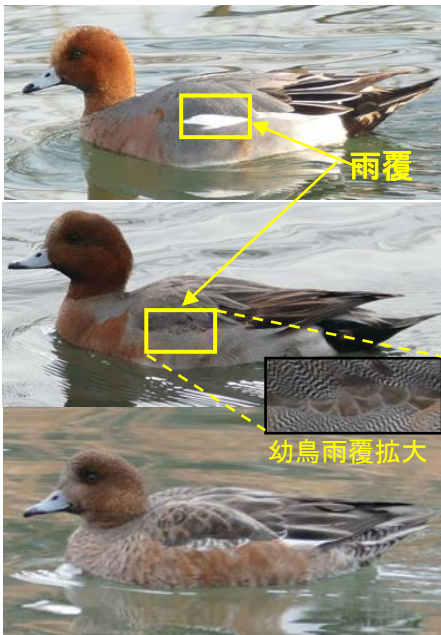


写真: 上: オス成鳥. 中: オス第一回生殖羽. 下: メス成鳥.

2. 分布と生息環境

分布:

ユーラシア大陸全体。繁殖地は北緯50~70度の地域で、東は極東ロシア、西はスカンジナビア半島とアイスランドまで。越冬地の東は日本から韓国、中国、東南アジア、西はヨーロッパからアフリカ北部まで。毎年1月に実施されるガンカモ類の生息調査(環境省)によると、日本での本種の越冬個体数は温暖な西日本に多く、これは水草や陸上の草本類を主な食物としているためと思われる。

生息環境:

日本の越冬地では、河川や湖沼、都市域の池、沿岸部などを休息地としている。同じ場所で水草などを採食することもあるが、夜間に陸に上がり、草地や農耕地などで採食することも多い。繁殖地では、開けた場所にある湖沼の周辺を好む。

3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

越冬期 渡り 繁殖期 渡り 越冬期

繁殖システム:

4~5月にかけて繁殖地に到着し、水辺近くの藪で営巣する。一夫一婦制で卵は8~9個。抱卵期間は24~25日。育雛期間は40~45日(del Hoyo *et al.* 1992)。本種が繁殖しているアイスランドのMyvatn湖では、5月下旬から6月上旬に営巣があり、6月下旬にヒナが孵化する。メスが連れている2~4週齢のヒナの数は平均3.93羽。メスは幼鳥が独立してから7月中旬に換羽する。オスは育雛に参加しないが、やはり7月に換羽する。(Gardarsson & Einarsson 1997)。

渡り:

モニタリングサイト1000ガンカモ類調査(環境省)の秋と春の渡り時期の記録では、北海道東部の風蓮湖、濤沸湖、コムケ湖などで最大1万羽を越える数が記録され、この地域がロシアとの渡りの主要経路だと思われる。2007年2月に宮崎県で衛星追跡用の発信器を装着したヒドリガモには、本州に沿って北上してロシアに向かう個体と、北に飛んで日本海を越えてロシアに向かう個体とがいた(Yamaguchi & Higuchi 2008)。

4. 食性と採食行動

前述のMyvatn湖では大量のユスリカが発生し、それが繁殖期の成鳥や雛にとって重要な食物になっている。ユスリカの発生量は、メスが連れているヒナ数と、オス成鳥の翌年の帰還率とに正に相関していた。Myvatn湖で標識した個体を調べると、メスはほとんどが生まれた場所に戻って繁殖するのに対してオスはそうした傾向が弱く、シベリアや北アメリカの繁殖地で見つかった個体もいた。

日本では、1954/55年の越冬期に諏訪湖で採集された成鳥18個体の胃内容物の調査では、稲粃、浮葉植物、沈水植物、果実、ユスリカの幼虫などが見つかった(羽田1962)。野付湾ではアマモをついばむ姿が見られるが、首の短いヒドリガモは水中のアマモに届きにくいので、ちぎれて流れているアマモを食べている可能性がある。

本種の短い嘴は草本植物をついばむ速度を高め、食物の摂取量を増やすこと役立っていると考えられている。飼育下での実験によると、草丈が3cmのときに最もついばみ速度が速くなり、その速度は草丈が伸びるにつれて直線的に遅くなっていった。草丈が長くなっても一回のついばみで食べる草の量は変わらないため、草丈が3cmのときに最も採食効率がよくなると考えられる(Mayhew & Houston 1998)。陸上での採食中は天敵に襲われる危険が高まる。採食中のヒドリガモは警戒のために時々頭を持ち上げるが、その時間は水域から離れるほど、そして群れの個体数が少なくなるほど長くなる。またオスの方がメスよりも警戒時間が長く、これはペアになっている場合にオスが配偶者防衛をしているからだと考えられる。警戒時間は群にいる同種の個体数だけではなく、共通の敵を持つ他種の存在によっても減少する。ヒドリガモの50m以内にダイシャクシギがミヤコドリが多くいるほど、オスの警戒時間が短くなることが報告されている(Jacobsen & Ugelvik 1994)。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● アメリカヒドリとの雑種

本種とアメリカヒドリとの中間的な特徴を持つ雑種が日本で見られることがある。アメリカヒドリは主にアラスカからカナダ北部にかけての地域で繁殖しているが、極東ロシアのアナディール川流域でも少数が繁殖しており、この地域で採集された外見的特徴はヒドリガモである個体からアメリカヒドリの遺伝子が見つまっているため、両種の分布の境界で交雑が起きていると考えられる(Kulikova & Zhuravlev 2010)。

● 食害

養殖海苔:

有明海では養殖海苔(葉体)への食害が報告されている。付近のカモ類の捕獲・解剖によると、マガモ、カルガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ヨシガモが海苔を採食していたが、特にヒドリガモとオナガガモで海苔を採食した個体の割合と、最大摂取量が多かった(兒玉ほか 2014)。

麦:

麦の食害は埼玉県、石川県、香川県などから報告がある。石川県の河北潟では夜間にヒドリガモ、マガモ、コガモ、カルガモが大麦圃場や蓮田で観察されており、食害を防ぐため、稲の刈り取り後に二番穂が出た水田に水を張ってカモを呼び寄せる「おとり池」が作られている。日本では本種は夜間に陸上で採食することが多いが、香川県の事例では、日中にねぐらに使用している溜池に隣接する麦畑で採食を行っていた(松本ほか 2014)。

その他:

京都市の西京極陸上競技場で、夜間にヒドリガモが芝生を食べに来たあとに残される糞が問題になったことがある(京都新聞 2014)。

● イギリスの幼鳥率調査

ヒドリガモは雨覆の色でオス幼鳥の識別が可能であるため、野外観察によって幼鳥率を調べることができる。イギリスで狩猟、標識調査のための捕獲、野外観察の3種類の方法で得られた2~3月のオスの幼鳥率(野外観察ではメス幼鳥を識別できない)を1988~2002年の間比較したところ、それぞれの方法で幼鳥率の値は異なったが、互いの年変化には相関があった。狩猟から得られた記録の幼鳥率が一番高くなっており(2002年の幼鳥率は約60%)、これは成鳥よりも幼鳥が撃たれやすいためだと考えられる。標識のための捕獲と野外観察の幼鳥率は2~3月の調査記録では近い値になっていたが(同約25%と30%)、前者は10~3月の毎月の変化が少ないのに対し、後者は10~1月に幼鳥率が毎月増加し続けていた。捕獲した個体では羽の様々な特徴から成幼を正しく判定できるのに比べて、野外観察ではすべての幼鳥が第一回生殖羽に換羽する1月までは、オス幼鳥の特徴である白い雨覆を確認できないためと考えられる。

各調査方法で値は異なるものの年変化が相関するという事は、いずれの方法でも個体群中の幼鳥割合の変化に応じた数値が得られていることを意味しているため、異なる調査方法で幼鳥率を調べている地域間でも幼鳥率の増減傾向の比較が可能だと言える(Mitchell *et al.* 2008)。

● 日本の越冬個体数

ガンカモ類の生息調査によると、2015年1月に国内で記録されたヒドリガモの総数は164,494羽で、マガモ、コガモ、カルガモに次いで四番目に記録数の多い種であった。同調査の1996~2009年の個体数変化の分析では、数の増減は小さく個体数は安定していた(Kasahara & Koyama 2010)。

6. 引用文献

- del Hoyo J, Elliot A, & Sargatel J eds. (1992) Handbook of the Birds of the World. Vol. 1, Lynx Edicions, Barcelona.
- 榎本佳樹 (1941) 野鳥便覧. 日本野鳥の会大阪支部.
- Gardarsson A & Einarsson A (1997) Numbers and production of Eurasian wigeon in relation to conditions in a breeding area, Lake Myvatn, Iceland. *Animal Ecology* 66:439-451.
- 羽田健三 (1962) 内水面に生活する雁鴨科鳥類の採食型と群集に関する研究_XIII_雁鴨科鳥類の食物. *生理研究* 10:181-211.
- Jacobsen O W & Ugelvik M (1994) Effects of presence of waders on grazing and vigilance behavior in breeding wigeon, *Anas penelope*. *Animal Behaviour* 47:488-490.
- Kasahara S & Koyama K (2010) Population Trends of Common Wintering Waterfowl in Japan: Participatory Monitoring Data from 1996 to 2009. *Ornithological Science* 9(1): 23-36.
- 兒玉昂幸・白石日出人・淵上哲 (2014) 有明海区河口域漁場におけるノリ葉体の消失原因について. 水産海洋技術センター研究報告 24:13-23.
- Kulikova IV & Zhuravlev IN (2010) Genetic structure of the Far Eastern population of Eurasian wigeon *Anas penelope* inferred from sequencing of the mitochondrial DNA control region. *Genetika* 46:1095-1101.
- 京都新聞. 2014年1月4日. 京都新聞女子駅伝直前、西京極「ふん害」困った. <http://www.kyoto-np.co.jp/sightseeing/article/20140104000091>
- 松本英治, 藤井寿江, 白井英治. 2014. ヒドリガモの麦畑での採食に対する隣接池の水量の影響. *Strix* 30:49-58.
- Mayhew P & Houston DC (1998) Feeding Behaviour Of Wigeon *Anas Penelope* On Variable Grassland Swards. *Wildfowl* 49:181-185.
- Mitchell C, Fox AD, Harradine J & Clausager I (2008) Measures of annual breeding success amongst Eurasian Wigeon *Anas penelope*. *Bird Study* 55:43-51.
- Yamaguchi N & Higuchi H (2008) Migration of birds in east Asia with reference to the spread of avian influenza. *Global Environmental Research* 12:41-54.

執筆者

神山和夫 バードリサーチ研究員

バードリサーチでガンカモの参加型調査を担当しています。ハクチョウ類の成幼記録は昔から蓄積されているのですが、ヒドリガモでも野外で成幼が調べられると知り、近ごろ興味を持って観察しています。

